少年たちよ
母親公害や試験の責め具を蹴っとばし
時には　腹ばいにねそべって
悠揚たる
物臭太郎のごとくあれ
お母さんがたよ
行きとどいた「親ごころ」こそくせものだ
人間についての考え方が
どこか狂っていないか
もう一度　問いなおしてみよう

自分をつくる

臼井吉見

ちくま
ぶっくす
9

自分をつくる

白井吉見

ちくま
ぶっくす
9

臼井吉見（うすい　よしみ）
1905年6月17日，長野県に生れる。
東大国文科卒業後，中学校，師範学校などの教師を経て，戦後『展望』の編集長。評論家として文芸時評をはじめ，諸分野において独特の論鋒で活躍。1973年，大河小説『安曇野』五部作を完結。
主著『近代文学論争』『人間と文学』『大正文学史』『一つの季節』『炉ばた談義』『安曇野』

自分をつくる

1979年3月10日　初版第1刷発行　　Printed in Japan
1979年10月20日　初版第4刷発行

ちくまぶっくす
9

著者　臼井吉見
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社 筑摩書房
101-91　東京都千代田区神田小川町2－8
電話　東京（291）7651（営業）
（294）6711（編集）
振替東京 6－4123

0395—05009—4604 © YOSHIMI USUI 明和印刷・和田製本

まえがき

五人の中学生が、遊び仲間のひとりの部屋に同宿した晩、二人が計画的にほかの三人を殺傷したという事件は、このごろの彼らのふるまいに驚いてばかりいられない世間にも、さすがにただならぬ衝撃を与えたようです。惨劇の行われたのは、親ごころの行きとどいた、理想的に設備された勉強部屋だったそうです。

その三日あとには、祖父母のあずかった孫の中学生が、電話で学友と喧嘩をはじめたので、注意したところ、いきなり、おばあさんの腹を蹴あげて、即死させたというニュースが伝えられました。

そんなところから、「過保護地獄」と銘打って、わが子の中学生や高校生に乱暴されて、血まみれになっている母親たちの「衝撃のレポート」の特集をくわだてた雑誌もあります。その一方、警察庁の発表によれば、少年少女の悪質犯罪が急増し、幼年自殺なぞも報ぜられていま

す。

こうなると、単に教育の手に負えるたちのものとは思えません。教育の荒廃どころか、人間そのものの荒廃でしょう。といって、教育の責任にあらずとして、すまされる問題ではない。まさに教育が、まともに取組まなくてはならない根本問題です。

冒頭の事件でいえば、行きとどいた「親ごころ」こそくせものでしょうが、さればとて、「過保護」一般の問題として片づけてしまえないものが残ると思うのです。大ざっぱなものいいになりますが、そもそも、親たちの人間についての認識が、どこか、まるでくるっているところからきているように思うのですが、どうでしょう？　そして、叱られることを覚悟でいえば、どうやら、そのまちがいは、母親につながりがあるように思われてならないのです。

こんな中学生が続出するのは、どう考えても、一種の薬害によるものと思います。見てきたような言いぐさになって恐縮ですが、早くも幼稚園時代から、まるで馬に草でも食わせるように、即効薬ばかり服用させつづければ、とりかえしのつかない害毒になって現れなかったらおかしいと思うのです。

だいたい親たちには、躾ということは、どう考えられているのかナと、ときどき考えさせられます。就学以前、公的教育以前の家庭の躾の問題です。口でそれを教える、なんていうのではない。むしろ、無言のなかにこそあるべきかもしれませんが、ともかく躾についての親たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の関心の有無、いやその濃淡がまず問題だと思います。

ぼくが、こんながらにもないことに口出しするのは、ほかではない。たとえば、電車内での子供たちの傍若無人の座席独占ぶり、母親がそれに加勢している図は、いまさらのことではない。ぼくなぞ、そのたびに、目をみはる思いをしないわけにはいかない。この母親は、なんと自分の子供をまるで天使なみに思いこんでいるのではあるまいかと。まわりのおとなたちも、にこやかにそれをゆるしているように思えてなりません。こうなると、人間とは何か、についてのわれわれの考え方が、どこかでまちがっているようにも思えるのですが、どうでしょう？

しかし、上記のような幼少年の出現は、無論、母親だけの責任にとどまるものではない。公害なみの側面もあって、社会や国家の責任なしとはいわれない。大いにありましょう。そんなことを考えると、ぼくは郷里の松本の開智学校を思いうかべます。あの建てものができたのは、たしか明治十年（一八七七）で、重要文化財に指定されています。あそこの校長室には、神田孝平揮毫の「上帝常見我」（上帝つねに我を見給う）という軸がかかっています。これを背にして、校長さんの机があるわけです。当時の神田孝平は、いまでいえば、文部次官というところでしょう。講堂には、正面に、「愛、正、剛」という横額がかかげられています。教師の自戒が、上帝常見我であり、教育目標が、愛、正、剛の三つだったわけです。開智学校について

は知りませんが、日本の教育目標が、まもなく、忠君愛国、富国強兵にきりかえられたことはご承知のとおりです。三十年あまり前の八月十五日まで、それがつづきました。

戦後は、これがどう変ったのでしょうか？　アメリカの占領政策が、旧日本を温存させる方向へ逆転したところへ、突発した朝鮮戦争が、廃墟からの立ちあがりどころか、繁栄の道へ向かわせるきっかけになりました。それからは、戦争の反省も苦痛もふり捨てて、ひたすら高度成長の道を走りつづけたわけです。

そして、日教組は、教師は労働者なりとの倫理綱領と、民主主義の教育目標との金看板を高高とかかげたことは周知の通りです。いま、かれらは、どんな自戒、どんな教育目標をかかげようとするのでしょうか？

教育の陰惨な現状は、問題が、つい足もとにあると同時に、ずいぶん遠いところにもあることを示しているように思いますが、さて、どうでしょう？　現在の日本にとって、教育の問題は、安全保障よりも、ぐんと切実かつ緊要な問題だと思います。

目

次

まえがき

第一部

自分をつくる……三

自治——自由と規律と　3

人生——精神の世界　7

人間をどう見るか　14

人間の正体をつきとめる　18

人間の土台づくり　24

自分自身の世界　27

ほんとうの友だち　30

からだを動かし、頭で考え、心に感ずる　32

人生観はおしつけられない……三五

ある母親の手紙から　35

教師という存在 41
子どもは広い原っぱに 45
おやじは何も言わなかった 55
親の限界 60
人生は出会いの連続だ 65
わが子は他人のごとく 71
読書について ……七五
乱読のすすめ 75
ある鉄道員と一冊の本 80
血となり肉となる本 84
人間の歩みを歴史的に見ること 87
小説ばかりが読書ではない 88

第二部

人間の条件 ……九五

未来を思い、過去をふり返る——時代の条件 95
たったひとりの人間——自分というもの 100
自分のすべてを賭ける判断——自由の意味 104
ひとりひとりはみな違う——他人の立場 107
日本および日本人 ……二四
血とことば 114
ことばの責任 118
自分を見つめる 120
「こっちの窓をご覧なさい」 124
熊本城の石垣 127
ほんとうにこわいこと 129
何が何でもお祭りさわぎ 131
価値あるものは動かない 133
悠々と去って行ったイギリス 136

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第三部

人間と文学……一四一
気味の悪い風景　143
時代が変われば表現も変わる　152
たよりない人間の存在　159
性に支配される人間　161
自分をコントロールする　165
われわれの負っている傷の深さ　167
知識ではない、深い知恵を　169
あとがき　173

第一部

自分をつくる

自治——自由と規律と

きょうはおめでとうございます。学校ができて二十年になるそうで、この中学がかさねた二十年という歳月は、日本の歴史にとっても、たいへんな時代でありました。それが、どんなにたいへんだったかということは、諸君には、まだはっきりわからないと思います。だんだんわかってくるでしょう。それがわかればわかるほど、自分たちの中学ができて、そこで学んでいた、あの時代というものは、日本の長い長い歴史にとって、なるほど、たいへんな時代だったなあ、ということがわかると思います。そういう、あとになって、諸君が考える時のことまでふくめて、ほんとうにおめでとうございます。

ぼくは、君たちのような中学生諸君に、話を聞いてもらうことなど、めったにないので、君らの元気な顔を見ていると、自分の中学時代のことが、しきりに思い浮かんできます。ぼくの

入学したのは、松本中学で、今は、すっかりかわって、深志高校と呼ばれていますが、あのお城の下に校舎のあったころの松本中学校を卒業しました。

この中学校は、時々思いうかべるんですけれども、たいへんいい中学だったと思います。もし、もう一度生まれてきて、中学へはいるってことになったら、ちゅうちょなく松本中学校へ入れてもらおうと思っています。ぼくより一年上級だった、評論家の唐木順三君もそういっています。ところが、入れてもらいたくても、それはありません。深志高校でいいじゃないかって思うでしょうが、これでは困るんです。どうしても、あのお城の下にあった、ぼくが入れてもらい、卒業させてもらった、あの松本中学校でなくてはならないのです。残念ながら、それが地上にないのだから、もう一度生まれてくるなんてことは、できるだけ考えないようにしているわけです。

では、そんなに気に入った中学校の話をしろ、といわれても、うまく話せないのです。いま考えると、ずいぶんかわった中学校でした。

帽子に線がはいっている。一年生は赤い線ですが、二年生になると、緑色にかわるんですよ。三年生は紫、四年生は黄色、五年生になると白というように、一年ごとに色がかわるんです。帽子は必ずかぶらなくてはならなかったから、一目見ても、何年生かはっきりわかるわけですね。今はそんなこともなくなったようですが、当時は、落第ということが、いたってあたりま

えであって、わけても、一年生と四年生からは、どっさり落第が出ました。上級へ進めないわけです。大体、一年生と四年生では、一割ぐらい落第があった。学年定員が、四クラスの百八十人ですから、二十人近くの落第が出るわけです。三月の終りに近く、学年末になると、全校生徒の成績が一せいに体操場へ張り出されるのです。むろん成績順ですよ。落第したものは、赤インクで書かれているわけです。一年生は、赤い名前が、二十人ぐらいずらっと並んでいて壮観でした。黒字の一番からずうっときて、しまいに落第の赤字が二十も並ぶわけですね。四年生もそうでした。二年生、三年生、五年生は十名足らずですが、一年生と四年生が、どっさり引きうけるわけです。でも、のんびりしたもので、なかには、おれは赤の首席だよ、とか、おれは何番さ、ただし、赤だがね、とか言っていました。学年別、成績順に張り出されるんですけれども、それをはぎとる者なんぞいなかった。幾日も幾日もさらされていて、そのうちに自然に風で取れるというふうなぐあいでした。そんなことには、わりあい平気だったと見えます。

こんな成績発表は、ぼくの一年生の時だけで、とりやめになりました。ところが、帽子の線の色がちがっているくらいだから、上級と下級、先輩と後輩の区別は、いたってきびしく、下級生は上級生に向かって、「〇〇君」と、君づけで呼ぶんですね。「君」というのは、同じ仲間か目下のものに言うのが普通ですが、当時の松本中学校では、上級生に向かって、「君」と呼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.